

J.LEAGUE NEWS

Official News Letter
vol. 131
30.Nov.2006



編集・発行
社団法人日本プロサッカーリーグ
ホームページ <http://www.j-league.or.jp>

Amazing, J.

スポーツで、もっと、幸せな国へ。Jリーグ百年構想

2006 Jリーグ ヤマザキナビスコカップ



©J.LEAGUE PHOTOS

千葉が2連覇を達成!

—— MVPに水野晃樹選手(千葉) ——

2006 Jリーグヤマザキナビスコカップ決勝は11月3日、東京・国立競技場に4万4704人の観衆を集めて行われ、ジェフユナイテッド千葉が鹿島アントラーズを2-0と破り、昨年に続く2連覇を達成した。千葉は優勝賞金1億円、Jリーグカップ(チェアマン杯)、ヤマザキナビスコカップ(ティファニー社製)を獲得。準優勝の鹿島には、賞金5000万円、Jリーグ盾が授与された。優勝チームの中から選ばれるMVPには、千葉のMF水野晃樹が輝き、賞金100万円、クリスタルオーナメント(ティファニー社製)が贈られた。また、決勝前日に開催された前夜祭では若手選手に贈られるニューヒーロー賞が発表され、川崎フロンターレの準決勝進出に貢献したMF谷口博之が選ばれた。

J.League Official Sponsors

Calbee

Canon

SUNTORY

JOMO

NicoS

KONAMI

AIDEM

HEIWA

GE Money

Network Partner



League Cup Sponsor

ヤマザキナビスコ

Jリーグ百年構想
パートナー

朝日新聞

Jリーグ ヤマザキナビスコカップ

2006 Jリーグヤマザキナビスコカップ 決勝
11月3日 14:09キックオフ 国立競技場

【入場者数】44,704人
【天候】晴 気温20.7℃ 湿度50%
【主審】上川 徹
【副審】柴田正利/相樂 亨
鹿島アントラーズ 0 0 前半 0 2 ジェフユナイテッド千葉
0 後半 2
【得点】80' 水野晃樹
82' 阿部勇樹



10冠か連覇か

穏やかな秋の休日、国立競技場のスタンドは色鮮やかな紅葉、黄葉で彩られた。電光掲示板側に陣取った鹿島アントラーズサポーターのえんじ色、その逆サイドを埋めたジェフユナイテッド千葉サポーターの黄色が、秋の陽を浴びて輝いた。



だが、緑のピッチはカップ戦のファイナルにふさわしい、息をもつかせぬ激戦の舞台だった。スピーディーな攻防、激しい球際の競り合い、すべての局面に勝利へのあくなき意欲が満ちていた。



決勝のキャッチフレーズにもなったように、鹿島には「10冠」、千葉には「連覇」というモチベーションを高める大きな要素があった。鹿島は過去、Jリーグ ディビジョン1 (J1) に4回、Jリーグヤマザキナビスコカップ (以下、ヤマザキナビスコカップ) に3回、天皇杯全日本サッカー選手権大会に2回の優勝を飾っている。一方の千葉は、昨年のヤマザキナビスコカップに初優勝し、ビッグタイトル獲得の感激を知った。歴史に名を刻む新たなカップウィナーを目指す両チームの対決は、千葉のキックオフで幕を開けた。

激しい競り合いを展開

「勝敗にこだわる競争力、競争欲が出せればと思う」(鹿島のパウロ アウトウオリ監督)
「とにかく、この試合に集中することが大事だと思う」(千葉のアマル オシム監督)

前夜祭の両監督はこのように、決勝への抱負を述べた。選手たちも指揮官の意を体現して、集中力にあふれたプレーを披露。ボール争いの一つ一つが勝敗に直結するばかり、随所に激しい競り合いが展開された。

最も烈な攻防をみせたのは、鹿島のFWアレックス ミネイロと千葉のDF水本裕貴のマッチアップだろう。水本はアレックス ミネイロにボールが渡る瞬間を狙って激しくチャレンジ。鹿島のエースストライカーも中盤に引いてマークを外そうとするなど、サッカーの醍醐味(だいごみ)の一つである1対1の興味深い駆け引きが演じられた。

前半は千葉が決定機を3度ほどつつかんだが、鹿島は守備陣の体を張ったブロックとGK曾ヶ端準の堅実なキャッチングにより、得点を許さなかった。



鬼武健二 Jリーグチェアマン ——両チームをたたえたい

素晴らしいゲーム、そして両チームともサポーターの応援がとても素晴らしかった。

前半はこう着していたが、終盤にいいシュートが決まった。水野、阿部とも素晴らしいゴールをしっかりと決めた。一方の鹿島は、シュートがそれたり好機を生かせず、運も悪かったか。

今大会はチケットも完売し、早くからムードが高まった。トーナメントで勝ち上がった両チームをたたえたい。春から始まり11月に決勝が行われる「ヤマザキナビスコカップ」が定着してきたことをうれしく思う。



千葉 アマル オシム監督 ——自分たちのプレーができたことに満足

最も満足しているのは、チームが自分たちのサッカーを、この(決勝の)ような大事な瞬間にできたということ。監督にとって、このような試合でチームにいつもどおりの実力を発揮させ、プレーさ

せることは非常に難しいが、それを達成した。リーグ戦(の第27節)で鹿島に4-0と勝っているが、今日はそのときよりも4倍も5倍もいい試合だったと思う。勝ったことよりも、自分たちのプレーができたことに満足している。



勝敗の鍵

試合の行方を左右する大きなポイントの一つは、後半開始から半ばまでの展開だろう。この時間帯は、鹿島の攻勢だった。アレックス ミネイロが2度にわたりヘディングシュートでゴールを脅かし、MF野沢拓也のシュートが左ポスト脇を通り過ぎるなど、千葉を押し込んだ。



「後半の8分から25分の間に主導権を握り、チャンスをつくって、そこを決められなかったのが大きかった」(パウロ アウトゥオリ監督)

「アントラズが先に1点を取っていたら、試合はどう転んだか分からない」(アマル オシム監督)

両監督の試合後のコメントは、この間の攻防が勝敗の鍵を握ったという点で一致した。

守勢に回った千葉だが、持ち前の走力を生かして鹿島陣内に押し寄せる。ボールを保持する選手を分厚くフォローし、主に左サイドから次々にチャンスをつくった。

「彼らが常に狙うのは、ボールを奪ったらサイドチェンジをして、そこから速攻を仕掛ける」と警戒していたパウロ アウトゥオリ監督だったが、まさにそのような形から8分に均衡が破れた。左サイドから攻めた千葉は、MF坂本将貴がピッチ



を横切るパス。右からフリーで走り込んだMF水野晃樹が、ゴール左隅に低いシュートを決めた。ヤマザキナビスコカップ決勝で記録された324分ぶりの得点である。

さらに2分後、右CKを得た千葉は、水野のキックをMF阿部勇樹がヘディングで合わせ、一気に2点差。その後、鹿島は3人の選手を一度に交代させたが、主導権を握った千葉の堅陣を崩すことはできなかった。2分間のロスタイムも過ぎ、上川徹主審がタイムアップを告げる笛を吹き鳴らす。スコアは2-0。千葉が見事に2連覇を達成した瞬間だった。タイトルの防衛は、1994年に3連覇を果たしたヴェルディ川崎(現 東京ヴェルディ1969)以来だ。

表彰式の後には、昨年のイビチャ オシム監督(現日本代表監督)のときにはなかった胴



上げ。「想像以上に重かった」(千葉のMF佐藤勇人)というアマル オシム監督の大きな体が宙に舞うと、選手、クラブ関係者、そしてサポーターはあらためて頂点を極めた感激に浸った。

ニューヒーロー賞に 谷口博之選手(川崎F)

今年のニューヒーロー賞には川崎フロンターレのMF谷口博之選手(21)が選出された。ニューヒーロー賞はヤマザキナビスコカップに参加した23歳以下



ニューヒーロー賞に選ばれた谷口選手

の選手を対象に、全国のマスコミ関係者の投票によって選ばれるもの。

谷口選手はヤマザキナビスコカップ8試合に出場、得点はなかったが、中盤の巧者として、チームのベスト4進出に貢献したことが評価された。例年このニューヒーロー賞に選ばれたプレーヤーは日本代表にも選ばれる傑材ばかり。谷口選手もU-21の日本代表に選出されたことのある期待の選手。

11月2日に都内のホテルで行われた表彰式に現われた谷口選手は、紺のスーツのポケットにヤマザキナビスコ商品を入れて登場、会場の笑いをかっていた。賞金50万円のほか、ヤマザキナビスコ製品1年分を副賞として受け取り、「チームのみんなと食べます。チームが負けた時点でダメだと思っていました。受賞を聞いてびっくりしました。これまでは、すごい選手ばかり選ばれているので、ばくも頑張ります」と話していた。

鹿島 パウロ アウトゥオリ監督

——これも勝負の世界



まずは勝者をたたえたい。(千葉は)これまでどおりの効率のいいサッカーをやっているという印象があった。努力を惜しまないという気持ちが選手の一人ひとりについて、それを実践したことが結果につながったのではないかと。前半は互角の戦いだと思う。後半

は8分から25分の間に、こちらがチャンスをしっかりと決めていけば、勝敗は変わったものになっただろう。これも勝負の世界。選手たちが教訓として生かしていくことが重要だ。

MVP 水野晃樹選手(千葉)

——リーグ戦に向けてしっかりと

今までやってきたことが結果になってうれしい。リーグ戦で結果がついてこない中で、この試合はとても大切だと考えていた。全員がいいプレーをできたと思う。アマル(オシム)監督に恩返しができることもよかった。試合前に監督からは「おまえの攻撃力を期待している」と言われていた。先制ゴールを決めたが、一人のゴールではない。自分が(MVPに)選ばれるとは思わなかった。修正点もあるので、リーグ戦に向けてしっかりとやりたい。



J1

浦和、優勝に王手！

11月23日に第32節を終えたJリーグ ディビジョン1 (J1) は、クライマックスへ近づいてつれ、昨季同様の予断を許さぬ優勝争いへの注目が高まった。

首位の座は第25節 (9月30日) 以来、浦和レッズが守ってきた。しかし、第29節でジュビロ磐田に2-3、第31節で名古屋グランパスエイトに0-1と敗れたこともあり、2位以下を大きく引き離す



© J.LEAGUE PHOTOS

ことができなかった。

だが、第32節には再び、流れは浦和に傾いた。ヴァンフォーレ甲府をホームに迎え、3-0の快勝。2位のガンバ大阪がアビスパ福岡と1-1の引き分けに甘んじ、3位の川崎フロンターレが3-4と清水エスパルスに敗れたためだ。この結果、浦和とG大阪の勝点差は5と開いた。浦和は第33節のFC東京戦に勝つか、それ以外の結果でも、G大阪が同節に京都パープルサンガを破ることができなければ、初優勝が決まる状況に到達した。また、川崎Fの優勝の可能性が消えた。

甲府戦の浦和は前半、FWワシントンが2本のPKを失敗したが、後半はヘディングで2点をマーク。MF山田暢久も巧みなドリブルから見事なシュートを決め、「優勝に向けての大きな勝点3」(浦和のブッフバルト監督)を獲得した。また、浦和はホームで21試合連続負けなしというJ1新記録もつくれた。



© J.LEAGUE PHOTOS

一方、G大阪は先制したが追いつかれ、後半の猛攻も実らなかった。西野朗監督は「可能性のある限り戦う」と、残り2試合への決意を述べた。

一方、J1残留をかけた戦いも、節ごとに緊張感が増した。第32節終了時点で自動降格圏内の17位、18位はそれぞれ福岡、京都。J2の3位との入れ替え戦に出場する16位には、セレッソ大阪がいた。大宮アルディージャのJ1残留が確定したため、これらの3チームが16位以下となることも決まった。入れ替え戦への出場で残留への望みをつなぐか、自動降格となるか、こちらの争いもし烈だった。

J2

自動昇格目指して

Jリーグ ディビジョン2 (J2) は、11月23日に第50節が終了。上位陣の直接対決を中心に、激しい争いが展開された。

終盤戦で最も注目されたのは、1位だったヴィッセル神戸が2位の横浜FCを迎えた首位攻防戦。この重要な試合に2-1の勝利を収めた横浜FCが、第43節 (9月30日) 以来のトップに躍り出た。神戸は第



© J.LEAGUE PHOTOS

45節からの首位の座を明け渡し、3位に後退した。

第50節を前に、首位の横浜FC、2位の柏レイソル、3位の神戸は、それぞれ勝点1差の競り合いだった。第49節で、これらの3チームの3位以内が決まっている。だが、ゴールを前にした3強は、足取りが重かった。横浜FCは13位の徳島ヴォルティスとのホームゲームを無得点引き分け。柏は試合終了8分前に失点し、8位のモンテディオ山形に0-1の敗戦。神戸は12位のザスパ草津に先制したものの、1-1の引き分けに終わった。横浜FCは首位の座をキープ。これを勝点2差で神戸、柏が追うという展開となった。



© J.LEAGUE PHOTOS

Jユース サハラカップ 2006

決勝トーナメント始まる

日本サッカー協会登録第2種 (高校生年代) の選手たちが参加する「Jユースサハラカップ2006 第14回Jリーグユース選手権大会」は、11月19日に予選リーグを終了。仙台、鹿島、浦和、大宮、千

葉、F東京、川崎F、横浜FM、磐田、名古屋、G大阪、広島、福岡、大分の14チームが勝ち抜き、日本クラブユースサッカー連盟の代表4チーム (三菱養和サッカークラブユース、FCトリプレッタユース、愛知フットボールクラブユース、アミーゴス鹿児島U-18) を加えた決勝トーナメントも始まった。決勝は12月24日に神戸総合運動公園ユニバー記念競技場で行われる予定。

「スポーツ組織における 戦略的広報パーソンのあり方」

Jリーグでは、毎年クラブ広報担当者を対象に広報研修会を開催している。今年「スポーツ組織における戦略的広報パーソンのあり方」をテーマに、スポーツマーケティングケースブック編集責任者の中村考昭氏に話を聞いた。

スポーツ組織における広報の役割と規模感について

“広報”と言ってもそのチーム規模や歴史、フランチャイズ特徴、エリアをカバーするメディア構成等により役割や体制は異なります。

最大公約数的に広報をとらえ全体像をつかむならば、例えばMLB30チームで働く2,408名のうち広報関連職は211名、NFL32チームのうち30チーム2,591名では252名と、どちらのリーグも広報関連職は9%前後です。またその部課名称を分析してみると、Public RelationsやPublic Affairsといった総称的な名称にとどまらず、Media Relations、Community RelationsといったPublicの対象を明確にした名称、業務を明確にしたFootball Media Relations、Baseball Information、Community Development、Fun & Neighborhood Servicesなど、さらにはStrategic Planning、Broadcasting、Marketingといったいわゆる“事業系”部門との兼業も行われています。

このような実態をみると「広報＝メディア対応のコストセンター」という範囲にとどまらず、「多彩なステークホルダーとのコミュニケーションハブ＆ブランド価値向上のための戦略部門＝ブランドプロデューサー」とでも位置づけられ、すなわちそれが“戦略的広報パーソン”の仕事の全体像とも換言できるのではないのでしょうか。

“戦略的広報パーソン”に向けたステップ

“戦略的広報パーソン”にステップアップしていく上で最も大切なのは当たり前かもしれませんが「マーケティング的発想からPDCAサイクルをまわす」ということに他なりません。すなわち、クラブの環境下においてマーケット(ホームタウン)の状況を、印象や感覚でなく“データ”でとらえ、攻めるターゲットを特定し、そのターゲットに対しどのような具体アクションを求めののかを含めた計測可能な目標設定をし、クラブの広報素材のうち何が訴求するかを考え、どのチャネルを使ってリーチすると効果的にアプローチできるか、ということを経営的に計画立案の上、その計画を徹底的に実行し、結果を真摯に検証して次のアプローチに活かす、ということなのです。

何が広報素材になりうるのか？ どのようなチャネルに注目すべきなのか？

スポーツブランドNo.1のNFLも、NFLトップブランドDallas Cowboysも、試合結果や選手情報といった王道の広報素材だけでなくTailgate Partyという米スポーツ文化を象徴する観戦スタイルや

その際の食事メニューの作り方といった一見細かなネタを素材として積極的に活用しています。これはNFLが「家族層を主要ターゲットとし休日の家族団欒の話題の中心にNFLを位置づける」という狙いの上での意図的な素材ピックアップです。

チーム再建中のNBA Trail Blazersは地元との絆を再確立するため、高校生のアメフト試合を選手が観戦したり、年間チケットホルダー初年度者向けオリエンテーションをチーム経営陣自らが実施していますが、これら活動を有効な広報素材ととらえチーム公式サイト上で積極的に広報しています。

ロナウジーニョがボールを落とさずゴールポストに蹴り続けるNikeの映像を見た方も多と思いますが“すごい技だな”と見たか、ネットを活用したBuzz Marketingの手本ととらえたかで広報の力量が測れます。なぜなら昨今の広報やマーケティングの世界では、マスメディア一辺倒の旧来型アプローチ以上にニューメディアを活用したアプローチが目ざされているからです。

スポーツ以外に目を転じてみても、例えば、資生堂マキアージュという商品プロモーションに4名の女優が使われましたが、その選定の背景に選手プロモーションのヒントが隠されていたと思います。

すなわち素材やヒントは身近にたくさんあるのですが“戦略的広報パーソン”にはそれらを的確につかむアンテナの感度も求められているのです。

資金や人材が潤沢でないクラブほど“戦略的広報パーソン”は重要

「資金や人材が豊富なら攻めの広報もできるが、どちらも不足してできない」といった声を聞きます。ただ、逆に不足しているからこそ“戦略的広報パーソン”としての知恵や工夫によりクラブ価値を上げ事業サイドにも貢献し資金・人材の拡充につなげるべきではないでしょうか？ ぜひクラブ経営を牽引していただければと思います。



中村 考昭(なかむら たかあき)

スポーツマーケティングケースブック編集責任者・発行人/株式会社クロス・ビー取締役副社長。株式会社リクルート、戦略系コンサルティング会社A.T.カーニー、スポーツマネジメント会社ADMのCSOを経て現職。小学校ではサッカー部、中学、高校と水泳部。大学からアメリカンフットボールを始め社会人でも実業団アメフトのリクルート・シーガルズに所属し日本一を2度経験。一橋大学卒。

「Jリーグ・アカデミー コーチングワークショップ」を開設



©JLEAGUE PHOTOS

「伝道師」の志直伝

東京を出るときには冷たい雨だったが、名古屋に着くとすでに青空が広がっていた。豊田市にあるトヨタスポーツセンターでは、秋の美しい日差しの中に緑のピッチが輝いていた。

10月24日、「第1回Jリーグ・アカデミーコーチングワークショップ」が、名古屋グランパスのセフ・フェルフォーセン監督を講師に開催された。Jリーグクラブの育成年代のコーチたちのための研修会だ。

コーチたちの研修は日本サッカー協会の主催で年に何回も行われている。しかしJリーグクラブのユース、ジュニアユースの指導者は、サッカーの指導を仕事にしているだけにまとまった休みをとることができず、なかなか参加できない。そこで、この第1回は、基本的に日帰りで参加できる研修の機会を提供しようという企画だった。

集まったのは、北はコンサドーレ札幌から南は大分トリニータまで24クラブの42人。トレーニンググラウンドでの約2時間の練習見学と、会議室を利用した約1時間の講義というスケジュールだった。

主催したJリーグ側でも、前半部分はトップチームの通常のトレーニングを見るだけだと考えていた。しかしフェルフォーセン監督は、練りに練ったプログラムを用意して待ち構えていた。

Jリーグ・アカデミーは、Jクラブ育成年代の指導者、育成担当責任者を対象とした「Jリーグ・アカデミー コーチングワークショップ」を開設した。

Jリーグには数多くの外国人監督が来日しているが、これまでその卓越した指導哲学や指導理論は所属クラブ以外で生かされる場が少なく、日本サッカー界の将来に向けて広く共有される場がなかった。本企画では、こうしたトップクラスの監督の考え方を直接聞き、指導現場を見られる機会をJクラブ育成年代の指導者に提供し、指導者としての幅を広げてもらうことを目的としている。

まず、ポゼッションゲーム(主としてパス回しを目的にしたゲーム)のいろいろな目的での使い方。ウォーミングアップの目的で、テクニック強化のために、戦術的要素を入れて、そしてフィジカル強化のために…。「パス回し」という点では同じでも、コーチたちの創造性によって、目的に応じた効果的なものができるということ、を、短時間でわかりやすく見せてくれた。



©JLEAGUE PHOTOS

続いて披露されたのはスリーバックの組織化だった。守備のポジショニング、そして攻撃の組み立てから押し上げまで、非常にハイレベルなトレーニングだった。

しかし何よりも驚いたのは、デモンストレーションのためのトレーニングに、グランパスのトップチームの全員が参加し、真剣に課題に取り組んでいたことだった。GK楯崎がいた。DF秋田も、MF中村も、FW玉田も懸命にボールを追っていた。

オランダ人のフェルフォーセン監督は、オランダ、ベルギーなどのクラブで監督を務めた経験をもつ人。同じオランダ人のドワイト・ローデヴェーヘス・コーチと二人三脚で、今季ははじめからグランパスの指導に当たっている。

グランパスは、今季序盤は悲惨な成績で、一時は降格の危機も叫ばれたが、夏ごろからプレースタイルが固まり、ぐんぐん

成績を伸ばしてきた。しかし順位はまだ「中の下」といったところで、普通ならとても他クラブのコーチたちを指導するような余裕はないところだ。

しかしJリーグからこの講習会の依頼を受けたとき、彼のなかにある、「プロ監督」以上の「志」が目覚めたのに違いない。それは、「サッカーの伝道師」の志だ。自分が信じるサッカー指導のあり方を多くの人に伝えたい。そして、オランダだけでも日本だけでなく、この地球上に、できるだけ多くの好プレーヤーを出現させたい…。

監督の志に、グランパスの選手たちも素直に応じた。その結果、研修会は、期待をはるかに上回るすばらしいものとなった。



©JLEAGUE PHOTOS

「私の職業はサッカー選手。その仕事を、美しいものにしよう」

フェルフォーセン監督は、そんな標語をクラブハウスに掲げている。

百数十年前にイギリスから世界に輸出されたサッカー。世界の各地で熱心にプレーされ、それぞれの特性を生かしながらレベルアップしてきた背景には、こうした「サッカーの伝道師」たちの志があったからに違いないと、帰りの新幹線のなかで考えた。

2006年11月1日付『東京新聞』夕刊
イブニングスポーツ「サッカーの話をしよう」より

2006 Jリーグアウォーズ功労選手賞

Jリーグは、11月21日に開催した理事会で、元Jリーグ選手の相馬直樹、小島伸幸および澤登正朗の各氏を、2006Jリーグアウォーズ功労選手として表彰することを決定した。表彰式は、12月18日横浜アリーナにて開催される2006Jリーグアウォーズの中で行われる。

【功労選手賞 日本人選手選考基準】

原則として以下の基準を満たし、Jリーグおよび日本サッカーの発展のために貢献をしたと認められる者を功労選手として表彰する。

- 所属クラブより推薦のあった者
 - 次の大会の合計試合出場数が300試合以上の者
 - ①リーグ戦：JSL、J1リーグ戦（チャンピオンシップ含む）、J2リーグ戦
 - ②カップ戦：JSLカップ、コニカカップ、リーグカップ戦、天皇杯
 - ③日本代表の公式試合：国際Aマッチ
 - ④Jクラブが参加するFIFAおよびAFCの国際試合
- *ただし、原則として上記①リーグ戦は200試合以上、③日本代表の公式試合は50試合以上とする

1. 相馬直樹（そうま なおき）

1971年7月19日生（35歳） 出生地：静岡県 ポジション：MF
 （所属クラブ）1994～2001年 鹿島アントラーズ、2002年 東京ヴェルディ1969、2003年 鹿島アントラーズ、2004～2005年 川崎フロンターレ
 （出場試合数）①J1リーグ戦 289試合、J2リーグ戦 15試合（合計304試合）
 ②リーグカップ戦 45試合、天皇杯29試合 ③日本代表 59試合
総計 437試合

2. 小島伸幸（こじま のぶゆき）

1966年1月17日生（40歳） 出生地：群馬県 ポジション：GK
 （所属クラブ）1988～98年 フジタ、ベルマーレ平塚、1999～2001年 アビスパ福岡、2002～2005年 ザスパ草津
 （出場試合数）①JSL12試合、J1リーグ戦 239試合、J2リーグ戦 23試合（合計274試合） ②リーグカップ戦 23試合、天皇杯 25試合 ③日本代表 5試合（+ベンチ入り36試合）
総計 327試合

3. 澤登正朗（さわのぼり まさあき）

1970年1月12日生（36歳） 出生地：静岡県 ポジション：MF
 （所属クラブ）1992～2005年 清水エスパルス
 （出場試合数）①J1リーグ戦 381試合 ②リーグカップ戦 66試合、天皇杯 39試合、その他19試合 ③日本代表 16試合
総計 521試合

Jリーグキャリアサポートセンター 活動報告

Jリーグキャリアサポートセンター(CSC)は、2006年上期の活動報告を行った。全クラブを対象としたOB交流会、キャリアカウンセリング、就学支援制度を利用したパソコン講座などのほか、今年はJリーグオフィシャルスポンサーの(株)アイデムの協力を得て、「コミュニケーション&マナー講座」などが新たに開催された。CSCのプログラムへの選手の関心は年々高まっており、就学支援制度を利用する選手も増加してきている。

今後は、大学と提携したeラーニング(通信教育)の推進や、Jリーグ・アカデミーと連携した、トップから下部組織までを対象とした選手一貫教育プロジェクトの開発など、現役選手、引退選手のみならず、ユース年代からのキャリア支援も推進する予定。

また、Jリーグ現役選手向け各種キャリア支援情報や引退選手向けのセカン

ドキャリア支援情報をまとめた「OFF THE PITCH2006」が完成し、現役選手および引退選手に送付した。

■OB交流会：8月1日～11月8日、全31クラブにて実施

▽参加いただいたOB講師(順不同・敬称略)

JリーグOB講師：小島伸幸、高橋寛人、野々村芳和、小倉隆史、保坂信之、河口真一、西野努、岡島清延、相馬直樹、吉田明博、田口禎則、前田義貴、内藤潤、小島光顕、中西哲生、波戸善行、塩谷伸介、藤田聡
 他競技のOB講師：荻原健司(ノルディック複合)、青島健太(野球)、中垣内祐一(バレーボール)、有森裕子(陸上)、相沢雅晴(ラグビー)

OB交流会参加選手による「希望するキャリアサポート活動」(単位：名)

	インターンシップ	現役選手向け目標設定研修	マナー&エチケット研修	就学支援制度	OB交流会	職業適性検査	キャリアカウンセリング
希望者数	97	36	66	185	83	89	17



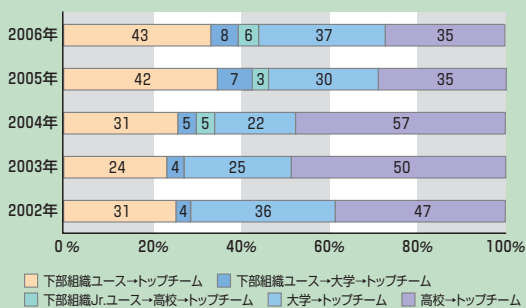
Jリーグ U-13リーグ戦を開催

Jリーグは、2007年度よりJリーグ加盟31クラブの第3種チーム所属の選手を対象としたU-13リーグ戦を実施することを決定した。同リーグ戦は、出場機会の少ない年代に定期的な試合出場の場を提供し、個の育成を行うことを目的とし、全国を5ブロックに分け、原則としてホーム&アウェイ方式で実施する。

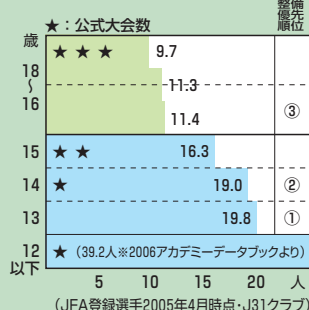
Jクラブは「優れたプロサッカー選手を1人でも多く輩出すること」を目

的に、下部組織を保有し、一貫指導体制のもと選手の育成に取り組んできたが、近年下部組織出身のJリーグ新人選手も年々増加している(表I)。しかし、その一方で、選手育成の過程において、13歳(中学1年)、14歳(中学2年)および16歳(高校1年)の公式試合が少なく、同年代選手の試合出場の機会が極端に少ないことが課題にあった(表II)。今回実施が決定したU-13リーグは、年代別の試合機会増加対策のスタートとして開催されるもの。

表I Jリーグ新人選手の輩出元別人数の変遷



表II 年代別保有平均選手数と公式大会数



- 大会名称：Jリーグ U-13リーグ(仮称)
- 地域区分：5ブロック(①北海道・東北・北信越 ②関東 ③東海 ④関西 ⑤中国・四国・九州)
- 開催期間：2007年5月～2008年1月を予定
- 大会方式：原則として2回戦総当たり(原則ホーム&アウェイ方式)
- 参加チーム：原則、J31クラブ3種チームの所属選手だが、同時にJFA(日本サッカー協会)2、3種改革プロジェクトとも協同し、地域の学校、クラブなどの参加も検討していく

Jクラブの経営情報公開に寄せて

早稲田大学教授 Jリーグ理事/経営諮問委員長 ◎ 武藤 泰明(むとう やすあき)

すでにご存知の方も多いものと思いますが、2006年9月、Jリーグは各クラブの協力の下、個別クラブの経営情報の公開をはじめました。以下では、その意味と意義について、思うところを述べたいと思います。

今回の情報公開は第3段階

まず何より理解していただきたいのは、今回の情報公開が「第3段階」のものであるという点です。とすると第1段階、第2段階は何か。まず第1段階ですが、これは、各クラブの経営情報が、すでにJリーグに対しては開示されてきたという点です。

Jクラブ各社は、リーグ発足当初から、収支に関する予算と決算を統一的な様式でJリーグに提出しています。すなわち、Jリーグは少なくとも内部的には、これまでも「ガラス張りの情報開示」を行ってきたのです。またこれに基づき、第2段階として、1999年度分より、Jクラブの経営情報の集計値が公開されています。この歴史がなければ、今回の「第3段階の情報公開」は実現できなかったらと思います。経営諮問委員会の活動が1999年の委員会設置以来一定の成果を挙げることができたのも、このような開示が実現されていたことによるものだと思います。付言すれば、同委員会には調査権があり、資金繰りの計画と状況、借入先と金利水準などを確認することができます。また大株主の異動については事前の申請が必要とされており、可否について理事会で審議されます。すなわち、Jクラブは今回の情報公開以前から、相当程度ガラス張りであったということがいえるものと思います。

リーグに所属している個別のクラブチームの経営情報を公開する例は、これまではなかったものだと思います。この理由は、そもそも法人格を有するクラブチームによって構成されているリーグがまだ少ないためでもあります。今後はおそらくそのようなクラブチームとリーグが増えていくのだらうと思います。これらのクラブチームが情報公開を実現しようとする場合には、上記のような「発展段階」を理解され、まずはリーグ内での情報開示、あるいはリーグ全体としての情報公開を進めていくことが必要になるのでしょうか。

情報公開の目的は「仲間を増やす」こと

つぎに、そもそもこの情報公開の目的



© J.LEAGUE PHOTOS

は何か。情報公開に何を期待するのかについて。これを一言でいうなら「仲間を増やす」ということになるのだらうと思います。

これもよく知られているように、Jリーグは百年構想を当初から掲げ、サッカーの振興、そしてリーグとしては、各都道府県に一つのJクラブがある状態を目指してきました。各都道府県に一つということは47クラブです。現状は、東京など大都市部には複数の

クラブがありますがJ1、J2あわせて31クラブ。そして今後、Jリーグに参加したいと考えているクラブや地域は30~40あるといわれています。

このように「仲間」は確実に増えつつあり、それ自体は喜ばしいことです。では、参加を希望しているクラブや地域が、Jクラブの経営とは財務的にどのようなものであるかということについて理解されているかといえば、おそらくそうではないでしょう。各地のチームを支援しようと考えている自治体や地元企業も、必ずしもよくわかっているとはいえないと思います。クラブチームの経営情報を公開することは、クラブ予備軍だけではなく、支援予備軍の方々にも、Jクラブ経営を理解していただくために必要なことなのです。また自分の子供や生徒がサッカー選手になりたいという場合、父母や教員の方にとって、子供が所属しようと考えているクラブやリーグの経営情報が開示されていることは、大きな安心の源泉になるものと思います。競技をしているのは見ればわかるがどのように経営が行われているか分からないというのでは責任を持って送り出すことができません。すなわち、Jリーグが考える「仲間」とは、クラブチームだけでなく、クラブの地元地域の行政や企業、選手、そしてその保護者や指導者を含む広範なものなのです。これらの仲間の理解があって、はじめてJリーグは発展していくことができるのだと思います。

今後Jリーグに参加するクラブ数はさらに増えていくものと思います。そして新たに参加を希望するクラブには、潤沢かつ安定した財務基盤を必ずしも持たないところもあるのではないかと思います。このようなクラブには、現在のJクラブの経営をぜひ参考にさせていただきたいと思うとともに、各Jクラブには、未来の仲間の範となったださるよう期待しています。

PROFILE



1955年 広島県生まれ。1980年 東京大学大学院修士課程修了。同年三菱総合研究所入社。主席研究員を経て、早稲田大学教授、Jリーグ理事/経営諮問委員長に就任。著作に『経営の基本』『持ち株会社のすべて』(以上日本経済新聞社)、『ファンド資本主義とは何か』『プロスポーツクラブのマネジメント』(以上東洋経済新報社)ほか多数。

写真提供: © J.LEAGUE PHOTOS



「Jリーグニュース」は100%再生紙を使用しています。